だいちゃんのだいぼうけんシリーズの１

～秩父のお祭り編～

～西風　そら～

この作品の著作権は、西風そらにあります

http://nisikaze.sakura.ne.jp

だいちゃんは一人旅が好きな謎の生き物。この世に一人しかいない。身長３０㎝位、体重ちょっと太めの猫一匹分。

だいちゃんが見える人間は少ない。でも人間に見えない生き物は、意外と沢山いるんだよ。

そうそう、だいちゃんって名前は、ついこの間、初めて付いたんだ。それまでは名前がなかったの。何でかって？　名前って、使ってくれる友達がいなきゃ、必要のない物だったから。

ある日、武蔵村山の商店街で、屋台を出しているおかしな子に出逢った。真っ赤な顔の、柿の木の妖精。頭の後ろが青いから、きっと渋柿だろう。

「何をしているの？」

「お店を出しているのよ！　見て分かんない？」

「……」

お店と言っても、縁台を出して、その辺の落ち葉や木の実を並べているだけだ。

「誰が買うの？」

人間には勿論見えないし、師走の激しい往来に蹴散らされそうだ。

「結構人気なのよ」

その時強い風がさあーっと吹いて、縁台の上の葉っぱを、みんなさらって行った。
「ほぅら、売れた！　まいどありー！」
「お代を貰っていないよ」
「こんな、その辺に落ちている落ち葉でお代を取れる訳ないじゃないの！」
なんだか面倒そうなので、関わるのをやめて立ち去ろうとした。
「ねえねえ、手伝って」
柿の木の妖精は、銀杏(いちょう)の木の下に行って、新たに落ち葉を集め始めている。いつもなら、気にせずさっさと行っちゃうんだけれど、この時足を止めたのは、本当に気まぐれの偶然だったんだ。
「あの…」
「あぁあ――!!、足元、踏んじゃ駄目ぇーー!!」
妖精の黄色い声に、片足を上げてケンケンした。
「これ！　こういうんが良いの！」
小さい妖精は、片足上げたその下から、緑の残った綺麗な銀杏の葉を拾い上げた。
「こういうのも？」

やれやれって感じで、なるべく痛んでいない葉を選んで、妖精に渡してあげた。
「そうよ、貴方なかなか良いセンスしているじゃない。お山の祭りに奉納するしめ飾りに使うのは、ちょっと緑を残して木から離れた葉っぱでないといけないの」
「え…？」
また、さあっと風が立った。
「あれ？」
目の前のガードレールの上に、雀位の小さい男の子が二人立っている。大きい方の子はふわふわした白い袋を持っている。
「誰？」
「さっきもいたわよ。ああ、葉っぱ集めを手伝ってくれたから見えるようになったのかしら？　こんにちは、小さい風すっかの兄弟さん」
「こんにちは、柿ただちゃん。葉っぱのお店ご苦労さん。お山のみんな、立派なしめ飾りが出来そうって喜んでいたよ」
「そのヒトだあれ？」
小さい方の風の妖精が、お兄ちゃんの後ろに回って、じっと見ている。
「葉っぱ集めを手伝ってくれた親切な通行人さん！」

柿ただちゃんと呼ばれた柿の木の妖精が叫んだ。
「そっか、ありがとう、僕達は小さい風すっかの兄弟。秩父のお山の風祭り参加する為に、新潟から来ているんだ。貴方のお名前を教えてくれる?」
兄の風すっかが礼儀正しく挨拶した。
「えっと、僕は名前ってないんだ。それに、手伝ったって程じゃないし…」
柿ただちゃんがその声を遮った。
「名前がないですって? それはいけないわ! これから一緒にお山の祭りに行くっていうのに!」
「えっえっ? …僕、そんな約束したっけ?」
「よし、ただちゃんがナイスでイカした名前を付けてあげる! 貴方の名前は『だいちゃん』!」
「ええっ?」
「エジプトの古い壁画に描かれた『メジェド神』って万物の神サマが、貴方にそっくりなのよ。だから『だいちゃん』!」
「??? …、ひ…一文字も被っていないじゃないか…」
ふと見ると、風すっかの兄弟が、頬を膨らませて、吹き出したいのを必死に堪(こら)えている。どうやら、この柿の木の妖精のこういうのはいつもの事で、逆らっちゃいけない種類のモノだっていうのも、何となく分かった。
ここで踵を返して全力で逃げ出す事だって、多分出来た筈なんだ。でも、…何でかな? そうする気にならなかった。
そんな感じで、『だいちゃん』は柿ただちゃん達と出逢ったんだ。

＊＊＊

だいちゃんはちょっと反省した。
一見ごっこ遊びにしか見えない柿ただちゃんの行動も、それに関わり、見えなかった物が見えるようになると、ちゃんと意味がある事が分かった。世の中には、身近にあるのに見落としてしまった面白い物が、きっともっと沢山あるんだろうなあ…。
そして今だいちゃんは、柿ただちゃんと一緒に、お山の祭りに来ている。いつも祭りなんて賑々しいものは避けていただいちゃんだけれど、そういう反省の心もあって、柿ただちゃんの強引な押しに乗っかる事にしたんだ。
お山の祭りは、この近辺の風の妖精と、風の妖精に関わる(見える)者達が、秩父の山奥で一堂に集まり、月が空を七回横切る

間、続く。風の宮にしめ縄を奉納したり、祝詞を挙げたりの神事もあるが、基本どんちゃん騒ぎだ。市が立ったり、それぞれの里の芸事を披露したり、珍しい食べ物や酒が振る舞われたり。

しかしだいちゃんは、それらをゆっくり堪能している暇はなかった。柿ただちゃんの出す屋台の手伝いを約束させられていたからだ。

柿ただちゃんの作るガマズミの実の首飾りやら、タンポポの髪留めやら、その他よく分からない物が、飛ぶように売れた。

だいちゃんが柿ただちゃんに焚き付けられて作った木彫りの動物なんかもよく売れた。つまり何でもよく売れるんだ。お代は口で言うお礼なんだもん。

でも、「ありがとう」「わあい、可愛い！」って言って貰うのがいかに素敵なお代か、だいちゃんにはだんだん分かってきた。

祭りの中頃、一日屋台をお休みして、二人で祭り見物をした。お礼を言って買い物したり、珍しい物を見たり食べたり。一人でこのお祭りを見物してもここまで楽しくなかっただろう。一緒にわきゃわきゃ騒ぐ柿ただちゃんがいて、何よりただの見物人でなくて、参加して造っているからじゃないだろか。

「見て見て！　百人みなみな踊りだって！」

「何、それ？」

「水上から来たヒト達だよ、わたし達も踊ろうよ！　それ、み～な～、み～な～♪」

だいちゃんは、柿ただちゃんに引っ張られて、その珍妙な踊りに加わった。

「何事も経験だ……」

＊＊＊

お山の祭りの最終日の夜は、それぞれが山車(だし)を作って空を練り歩く。風の妖精達が総動員して、空に道を作ってくれるんだ。

柿ただちゃんとだいちゃんは、屋台を分解して神輿(みこし)を作った。

「もっと飾りを一杯付けて、カッコいい神輿にしようよ」

「うん！　ジャンジャンバリバリなお神輿にしましょ！」

二人であーだこーだとシュールな神輿を作っていると、小さい風すっかの兄弟がやって来た。

「良い場所キープしておいてあげたよ、僕達の山車のすぐ後ろさ」

そう言って、何やら書かれた木札を神輿のてっぺんに括り付けてくれた。
「ありがとう」
「柿ただちゃんとだいちゃんは、屋台の売り上げを使うの？それとも貯蓄しとく？」
「えっ？」
だいちゃんは狐につままれた顔で聞いた。
「売り上げってお礼でしょ？　お代貰ったっけ？」
「何だぁ、説明していなかったの？　柿ただちゃん」
「あれぇ…？　言わなかったっけ？」
「売り上げの使い方を知らなくて、お祭りに参加していたの？」
だいちゃんは一瞬むぅっとしたけれど、風すっかの兄弟が尊敬の眼差しでこちらを見ていたので、その気持ちはすぐに消えた。
「あのね、屋台をやって、お祭りに来た沢山のヒトに『楽しいの心』を貰ったでしょ。それが売り上げ。それ、使えるんだよ」
兄の風すっかが、ゆっくりとだいちゃんに教えてくれた。
「どうやって使うの？」
「風の精に色んな事を頼めるの。楽しいの心の分だけ風が使えるんだよ。例えば…」
「ただちゃんは旅行に行くつもりなの、飛騨高山の親戚に会いに」
「そう、柿ただちゃんみたいに、何処かに飛んで行くのを頼むヒトが多いよ。後、届け物とか…」
風に乗って好きな所に飛んで行けるなんて、だいちゃんにとっては夢のような話だ。だいちゃんは、降って湧いた嬉しいお話に、わくわくした。
「僕はどのくらいの『楽しいの心』を持ってるのかしら？　その量はどうやって計るの？」
小さい風すっかの兄弟は小首を傾げて顔を見合わせた。
「ん…ん…ん……、量って言っても、足りなくなったヒトは見た事ないし…。だって、自分の分以上の願い事をするヒトなんて、いないでしょ？」
何だか話が噛み合わない？　だいちゃんはふっと気付いた。そうか！　自分がヒトにしてあげる以上の事をヒトに求める者には、風の妖精が見えないんだ！
途端にだいちゃんは不安になった。さっき、だいちゃんは随分と欲深かった。行きたい所で頭が一杯になったんだ。欲深い自分はここにいられなくなるんじゃないかしら…？

「だいちゃんは旅が好きって言っていたの。きっと何処か素敵な場所に行きたい筈よ、ね！」
「そう？　だいちゃんの大きさなら、大人の風すっか何人か掛かりになるけれど、ちゃんと飛べるよ。行きたい所、考えておいてね」
「僕…、いいよ…」
「え？　どうして？」
「大人の風すっか何人か掛かりなんて、そんな大変な事を頼める程、僕、働いていないと思うんだ。僕、柿ただちゃんにくっ付いて来ただけだし…」
柿ただちゃんは困惑顔でだいちゃんを見上げた。
風すっかの兄弟も、自分たちが何か悪い事を言ったのかしら…？　と、困った顔を見合わせた。

「新潟は好き？」
今まであまり口を開かなかった弟の風すっかが言った。
「風すっかの館に来ない？　それならボク達帰り道だし、だいちゃん、気にしなくてもいいでしょ。それにボク、もっとだいちゃんといたいんだ」
「それは良い考えだわ」
だいちゃんが返事する前に、柿ただちゃんが明るく言った。
「なら、私は高山の帰りに新潟に寄るわ。一緒に新潟見物しましょうよ」
だいちゃんの顔がかあっと熱くなった。
何か話がぽんぽん進むし、風すっかは自分といたいってさらりと言うし、柿ただちゃんは当たり前みたいに一緒に新潟見物しようって言うし…。しかも僕、風すっかの館に招待されたの？
嬉しいやら、驚きやらで混乱している間に、ほら貝がブオオーと鳴って、祭りのエンディング、風渡御(かぜとぎょ)が始まった。
「しっかりつかまっているのよ」
柿ただちゃんに言われるままに神輿につかまると、突風と共に神輿はびゅうと舞い上がった。
山のあちこちから様々な神輿や山車が舞い上がる。そして上空で列になって練り歩き始めた。
風すっか達は見事な龍の山車をうねらせ、その背の上で色んな楽器を持ち、華やかな雅楽を奏でている。末尾で鼓を持った小さい風すっか兄弟が手を振っている。
柿ただちゃんも神輿の上にチョンと座ってカスタネットを叩きはじめた。

「はい」
いつ用意したのか、だいちゃんは大きなタンバリンを渡された。
「はは…」
だいちゃんはおずおずタンバリンを振ってみた。シャラシャラと綺麗な音がして、だいちゃんの心の不安を洗い流してくれる気がした。
遥か地上に秩父や飯能の街の灯が見える。風は心地良く、何だかとても素直な気持ちになれた。
「柿ただちゃん、お山の祭りに誘ってくれてありがとう」
「あら、誘ったのはただちゃんだけれど、こんなにお祭りを楽しめたのはだいちゃんのお蔭だわ。こちらこそありがとう」
「僕、新潟に行きたいな」
だいちゃんは自然にそう言えた。柿ただちゃんは嬉しそうにカスタネットをカタタンと鳴らした。
その日、見える人には秩父の山の上空にチラチラ流れる光が見えた筈だよ。

＊＊＊

柿ただちゃんは急いでいた。
飛騨高山の親戚干し柿ただちゃんの里で、引き止められるまま長居していた所に、小さい風すっかの弟が大変な知らせを持って飛んで来たのだ。
「兄ちゃんも捜索隊に加わっているんだ、もう見つかっていたら良いんだけれど」
弟風すっかは、支給されたばかりの風袋を頑張って御しながら、後ろの柿ただちゃんに説明した。
「もう！　だいちゃん、何で慣れない舟なんかに乗ったのよ?!」
「だいちゃん、鰤(ぶり)を釣りたかったんだと思う」
「ぶり?　魚の鰤?」
「うん、この季節の寒鰤がこの世で一番美味いなんてみんなが言うから…。でも、海が荒れていて、しばらく舟が出せなかったの」
「鰤…鰤が食べたくて独りで舟を出して遭難したっていうの?」
「違うよ、食い意地が張っているんなら、お酒も一人で飲んじゃった筈だよ」
「…?」
「だいちゃんがあんまり『売り上げ』を遣うのを遠慮している

から、ボク達お酒をあげたの。新潟の美味しいお酒」
「お酒…」
「食い意地が張っているんなら、一人で飲んじゃう筈でしょ。だいちゃん、封を開けずに待っていたんだよ。そんなに美味しいなら、柿ただちゃんと飲まなきゃって」
「……」
「だいちゃん、この世で一番美味い肴とお酒で、柿ただちゃんをお迎えしたかったんだよ」
「……」
柿ただちゃんは口をギュッと結んで黙ってしまった。弟風すっかは風袋のスピードを上げた。

＊＊＊

風すっかの館は寺泊沖合の海上スレスレに浮かんでいる雲の中にある。茅葺きの純和風平屋建てで、やたらに広い。
弟風すっかが庭の停車位置にひゅんと降りると、柿ただちゃんも袋から飛び降りた。
兄ちゃん風すっかが、縁側から駆け寄って来た。縁側では捜索から戻った大人の風すっか達が、熱い飲み物で身体を温めている。

「だいちゃんは?!」
柿ただちゃんは差し出された甘酒を受け取るのももどかしく、急き立てて聞いた。
「見つかっていない。でも目撃者はいた。流された先も分かった」
「だったら、すぐ行こうよ!」
「それが……」
だいちゃんは海流に乗ってしまい、樺太まで流されたらしい。目撃した海鳥が教えてくれた。
「舟が転覆とかの最悪の事態は免れたようだけれど…、樺太となると…」
「何なの? 助けに行かなきゃならないのは変わらないでしょう?」
「風の精には境界線があるんだ。我々はオホーツクを越える事は出来ない」
風すっかは基本優しく親切だ。しかし掟は絶対破らない。それは仕方のない事だ。風が好き勝手に吹いたら、大変な事になってしまう。
「では、お願い、私に風袋を貸して下さい、私が海を越えてだいちゃんの所に行くわ」

「風の眷族(けんぞく)でない者に、風袋は扱えないよ」
大人の風すっかに言われて、柿だだちゃんは、弟風すっかの風袋をバッと引ったくって、ヒュッと垂直上昇した。そして空中でピタリと停止して、そのままゆっくり降りて来た。
「凄い！」
「いつの間に…」
大人の風すっか達は顔を見合わせて、一斉に小さい風すっかの兄弟を睨んだ。
「え？　…だって、柿だだちゃんがあんまり教えて教えてってしつこいから、ちょっとだけ…」
兄ちゃん風すっかが咎められる前に，柿だだちゃんが立ちはだかって一気に喋った。
「いざと言う時役立つと思ったからよ！　ほら、今役に立つでしょう！　さあ、風袋を貸して頂戴！」
「駄目じゃ！」
真っ白な眉毛が目を隠したお爺さん風すっかが、奥座敷から出て来た。皆、ザッと道を開けた。
「お願い…」
「今の腕前だけでは危なくてとても貸せん、短期特訓せねばな」
「あ、ありがとうございます！」
「厳しいぞ」
「は…はいっ！」
「それと小さい風すっか兄弟…、お前達には風袋を他の者に触らせた罰を与えねばな」
柿だだちゃんが何か言うの制して、小さい風すっか兄弟は、白眉おじいさんの前に控えた。
「お前達はまだ役割を持たない未熟者だ。一人前ではないから境界線を越えても障りはない。一緒に行って、我が館の大切な客人を守りなさい」
「は…、はいっ！」
柿だだちゃんは風袋の短期集中特訓を受けた。スパルタでアカギレだらけになったけれど、鼻水を凍り付かせながら頑張った。休む間もなくその日の午後には北の海に向けて旅発った。

＊＊＊

だいちゃんは落ち込んでいた。あの日は海は凪いでいると思ったんだ。
この世で一番美味い寒鰤を釣って帰ったら、風すっか達は喜んでくれるだろうか？　柿だだちゃんもきっと喜んでくれる。

風すっかの館で毎日もてなされっ放しだったから、何か喜ばれることをしたかったんだ。
なのにいきなり海が荒れ、方向も分からなくなって、何とか陸地にたどり着いたけれど、ここは一体何処なんだろう？
ああ、もう、僕って、なんておっちょこちょいの半端者なんだ～～…。だいちゃんは浜辺にうずくまってしまった。凍える風が白い物を肩に積もらせるが、だいちゃんは動く気力がなくなっていた。

＊＊＊

柿ただちゃんと小さい風すっか兄弟は、荒れる冬の日本海を何とか渡り切って、樺太の岸壁に降り立った。
「どうする？　浜辺をシラミ潰しに捜してみる？」
「任せて」
柿ただちゃんが一歩進み出て、胸で手を組んで唄い出した。いや、口を大きく開け閉めしているが、声が聞こえない。
「……？」
暫くして、一羽の海猫(ごめ)が降りて来た。
その背には二人の色白な妖精が乗っていた。フォルムは柿ただちゃんと通ずる物がある。
「初めまして、私、柿ただちゃん、海を越えたあっちから来たの。人捜ししているの、助けてくれない？」
初対面の者にそんなざっくりした説明で良いのか？　風すっか兄弟は呆れたが、二人の妖精は即座に頷いて協力を約束してくれた。
「仲間みんなに聞いて来てあげる、あと、鳥さんと海豹(あざらし)さんにも」
飛んで行く海猫を見送りながら、風すっか兄弟はキョトンとした。
「知り合い？」
「いいえ、初対面に決まっているでしょ」
「初対面で、よく二つ返事で協力してくれるね」
「あら、だって、あの子達もただちゃんだもの、『樺太ただちゃん』!!」
「樺太ただちゃんって…、じゃあ、柿ただちゃんは、日本ただちゃんなの？」
「正式には大和東国属武蔵野群樹木目秋結実赤色種……長くなるけれど、今聞きたい？」
「いや…、いいです…」

さっきのただちゃんは樺太の『ハイマツただちゃん』と『ツルコケモモただちゃん』。
二人はあちこち聞いて回ってくれたが、だいちゃんを見たってヒトはいなかった。ただ、海豹の浜に、舵の壊れた舟があったらしい。だいちゃんは上陸はしているみたいだ。三人は少しほっとした。
「みんなに引き続き注意するよう、頼んであるわ」
「ありがとう、恩に着るわ」
「ううん、ただちゃん族は助け合う物なんだから、気にしないで。早く見つかると良いわね」

捜索本部に提供してくれるという彼女たちの住処に案内されながら、兄ちゃん風すっかが、ハイマツただちゃんに聞いた。
「助け合うって、規則とか掟なの?」
「さあ、誰が決めた訳でもないわ。うーん…本能?」
「そうよ! 私達『か弱い生き物』は助け合うように出来ているの!」
柿ただちゃんが、小さい身体を大きくそらせて言った。
「柿ただちゃんはぜってー、か弱くない……」
弟風すっかが、小さい声で呟いた。

ハイマツただちゃんの住処は崖を下りきった浜にあった。
「新潟だとハイマツは高い山にしかないのに」
「樺太って新潟の高山と同じ位、厳しい気候なんだね」
「ホント、雪が吹き溜まってこんな雪だるまが出来ているわ」
柿ただちゃんが何気なく蹴とばした雪だるまの表面の雪が、ごそりと落ちた。
「…!! …って…だいちゃーん!!」
何とそれは、うずくまったまま気を失っただいちゃんだった。
「すんごいよな…、柿ただちゃんて……」
風すっか兄弟は目を真ん丸にして、呆然と立ち尽くした。

＊＊＊

だいちゃんはハイマツただちゃんの住処で介抱された。回復したら、息つく暇もなく働かされた。
春の準備をする樺太ただちゃん達にとって、猫の手でも謎の生き物の手でも借りたい程忙しい時期だったのだ。
「忙しい時期にみんな快く捜索に協力してくれたのよ」
柿ただちゃんはだいちゃんのお尻を押して、原野の種蒔きに追い立てた。風すっか兄弟は、それがだいちゃんに落ち込む暇

を与えない柿ただちゃんの配慮だと分かっていた。

ひとしきり勤労奉仕も終わり、だいちゃんも元気を取り戻した。ヒトの役に立つというのは、だいちゃんにとって一番の栄養なんだ。壊した舟はだいちゃんの『楽しいの貯蓄』で賄えるよ、と言って貰えて助かった。

「さて、どうする?」

風袋が三つもあれば、大きなだいちゃんでも、ゆっくりなら新潟まで乗せて帰れる。

「僕…、僕、勝手な事、言っていい?」

「どうぞ」

「僕、樺太を旅したい。もっと色んな経験をして、強くなって、風すっかの館に行ってもみんなの役に立てるよう」

「ふふうん…♪」

柿ただちゃんは唄うように返事した。そう言うと予想出来ていたようだ。

ここ数日、樺太の原野を流れる風に、だいちゃんは思い切り心を奪われているみたいだったもの。

「ごめんね、帰りは人間の交通機関に潜り込むから。それと、新潟の風すっかさん達に手紙を書くから、持って帰ってくれる?」

「うん、いいよ。やっぱりだいちゃんは旅をしている方が、似合うよ」

兄ちゃん風すっかは、軽やかに引き受けた。

その夜、他の三人が暗躍していたのを、だいちゃんは知らない。

翌日、四人は崖の上に立った。樺太ただちゃん達が見送りに来てくれた。だいちゃんは、三人の大切な友達とお別れするので、胸が一杯だった。

「柿ただちゃん、兄ちゃん、弟君、本当にありがとう! 元気でね」

一陣の風が立った。

「じゃあね、だいちゃん、また逢う日まで、アデュウ!」

兄ちゃん風すっかが、風袋に乗って、ふわりと舞い上がった。

「新潟のみなさんによろしく〜」

「兄ちゃん、じゃあ、お願いね〜」

だいちゃんの両脇で、柿ただちゃんと弟風すっかが、すまして手を振っている。

「はぁあ…？」
だいちゃんは左右を交互に見て、口をぱくぱくさせている。
兄ちゃん風すっかは、ウインクして、ひゅうと飛び去ってしまった。
樺太ただちゃん達は、くすくすと笑っている。
「さ、行きましょ、だいちゃん。樺太の大地には一体どんなわくわくが待っているのかしら。独り占めしようったって、そうは問屋さんが卸さないわよ」
「ボクも、やっと兄ちゃんを説得出来た。大人になって名前を貰って、風すっかの役割が付いたら、もう自由に旅になんて出られない。修行って名目で、お許しを貰ってくれるって」
「ぼ、ぼ、僕は…!!　…」
慌てるだいちゃんの背中を、ふわりと何かがおおった。物凄く暖かいのに、羽根みたいに軽い、縞模様のマントだ。
後ろでハイマツただちゃんが、にこっと笑った。
「樺太ただちゃんに伝わる、護りを込めた『シマシマ合羽』よ。タベ、柿ただちゃんにも手伝って貰って、急いで仕上げたの。貴方達の旅が素敵な物になりますように！」
気が付けば、二人もお揃いの合羽を羽織って、にこにこにっと笑っている。
だいちゃんは観念した。独りで旅に出るより、ずっとわくわくした気持ちなのだ。それに素直に従う事にしたんだ。
かくして、だいちゃん、柿ただちゃん、小さい風すっかの大きな冒険が始まったんだ。

～おしまい～

二〇〇九・二・某